

## 英国の大学における日本語・日本文学研究の 史的展望と現状 (承前) (1)

井 上 英 明

1983年8月9日、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院 School of Oriental and African Studies, University of London (以下、SOAS と略称) の日本語・日文学科で主任教授をつとめた同大学名誉教授フランク・J・ダニエルズ (Frank. J. Daniels) はロンドンの北郊、セントジョーンズウッド、アベイロードの自宅で84年の生涯を閉じた。教授のかつての学生の一人であった現駐日英国大使コターツェ卿は日本の新聞紙上に異例の追悼文<sup>オビチュアリイ</sup>を寄せ、ダニエルズ教授の長逝を悼んだ。

思えば太平洋戦争突入から大戦後、今日に至るまで、英国における日本語・日文学を中心とするジャパノロジーの総括的展望はこのフランク・ダニエルズ教授とその生涯の伴侶であった夫人オトメ (乙女) を抜きにして語ることはできない。というのも、現在、英国のアカデミーで、ジャパノロジーのうちなにかの講座を担当する60歳以上の学者たちのほとんどは、かつてダニエルズを日本語の師としたはずであるし、とくに日本語・日文学関係でドクターの学位を有する研究者たちの多くは、ダニエルズを学位請求論文の主査としているからである。

フランク・ジェームス・ダニエルズは1899年11月、イングランドの南、ケント州に生まれ、1927年ロンドン大学で経済学の学士号をとるや、翌年、駐日英国大使館付海軍武官として日本に赴任する。5ケ年の日本滞在の後、帰国して海軍省に勤務したが、本人の談によると生来役所勤めは不向き、さっさと官職を辞して1933年再度来日、旧制小樽高等商業学校 (1935年まで) や旧制静岡高等学校 (1939-41) の英語の教師となり、その間、日本婦人オトメと結婚し、ロンドン滞在中から持ちこしの、ケインブリッジの言語学者、C.K.Ogden の新しい語彙理論 Basic English にもとづく和英辞典の著作に没頭した(2)。ダニエルズ夫妻に帰国を余儀なくさせたのは、1939年9月ドイツのポーランド侵入による、英仏の対独宣戦布告、つづく40年6月パリのドイツ軍による陥落、さらに独・伊とともに枢軸国の日本の太平洋戦争突入が時間の問題と予断されていたためである。1941年春、ダニエルズ夫妻は旧制静岡高等学校を辞し、アメリカ経由で帰国の途につくが、当時大西洋航路はドイツ海軍のUボートが出没し、しばしば船舶が撃沈され、そのためにただちに英国へ渡航することははなはだ危険であった。ダニエルズ夫妻は約6ヶ月アメリカにとどまり、ハーバード大学に身を寄せる。そこではオグデンのケインブリッジ・モダン・コレッジの僚友で、Basic English の主唱者でもあった I. A. Richards が客員教授をしていたからである。さらに

若き E・ライシャワー教授もいて、ダニエルズは Basic English の研究にそのままさ  
わることができたが、日に日に険悪になっていく日本と英米の関係の中であって、日本女性  
たるオトメ夫人の胸中いかばかりであったか、察するにあまりあるものがある。ダニエル  
ズ夫妻がやっとの思いで英国に帰りつき、ロンドン大学の SOAS の日本語・日本文学科の  
スタッフに加わったのは1941年12月8日の旧日本帝国海軍によるパール・ハーバー奇襲作戦  
のわずか2ヶ月前であった。そのときの SOAS の日本語・日本文学科の専任教員は前稿で  
触れた E.Isemonger と日本人講師 S.Yoshitake のわずか2名であった。そこにダニエル  
ズが帰ってきて都合3名の教授陣となり、同科の学生は5名、しかも、かれらは1週間か  
2週間に1度しか出席しない、臨時聴講生オイクジヨナル・スチューデントだった。ダニエルズは他の2名の同僚  
教師とともに、大学ではたった5人の学生、しかも、たまにしか出てこない学生を相手に、  
ほんの一時的ではあるにしても、すこぶるのん気な教壇生活を送ったにちがいない。ちな  
みに、英国の大学教師の幸福感は聴講する学生の数に逆比例するようである。しかし、こ  
うした気楽な生活は同年12月8日で、いっきょに全国民あげての緊迫感に転じ、翌年の5月に  
決定的な終止符がうたれる。この年の1月、日本軍はマニラを占領、2月にはシンガポール  
を陥し、英国の極東艦隊に壊滅的な打撃を与えていた。ロンドン大学 SOAS では、日  
本語教育が対日戦という戦争目的のために本気になって開始されたのである。第2次世界  
大戦中の米・英を中心とする連合国の諸大学における日本語教育の動機、ないし目的はほ  
ぼ100パーセント「汝の敵を知れ」Know your enemy のスローガンで行われたこと、これ  
は客観的な事実であるといつてよい。こうした事実を戦時下の日本国内における英語教育  
のスローガンと対比してみると、日本もまた同じく「汝の敵を知れ」という戦争目的に大  
きく支配されながら、日本での英語教師とその教授法は敵=英語の正体を英米人教師を採  
用することによって、より厳密に、精確に見抜くといった、科学的・実証的・経験主義  
的な方向をたどらず、英語の教育目的は世界的経綸を有する国家的指導者の育成という、  
誇大妄想的なスローガンにすりかえられていく。戦時中の日本国内では英語を「興亜語」  
と改称し、大東亜共栄圏・八紘一宇の大理想を実現する方便として英語教育が宣伝された  
が、それを宣伝する側の英語教師の大半は、敵の正体=アングロ・サクソンの文化の真髓に  
盲目であったため、事態は悲劇的というより滑稽でさえあった。たとえば当時の高名な英  
語教育者のいくつかの発言を川澄哲夫氏の論文から拾ってみると、ほぼ以下のような調子  
である。これは到底学者の書いた文章とは言い難く、軍国少年の未熟な作文でしかない。

大東亜の南部一帯が英語を日常語としてゐることは実に怪しからぬことである。この  
怪しからぬことを正道に返すのが今度の聖戦の目的の一つである。併しその目的完遂の  
process として我々は英語を使用する必要がある。我等の究極の目的は日本語を大東亜  
に一般化することであるが、物には順序がある。即ち過渡期の用語として英語は最も便  
利である。(伊地知純正)

我が日本語を他の民族に教へる時も、又諸種の外国語を日本人が学ぶ時も、言語を利用して我が八紘一宇の大理想を実現する手段となすのが大眼目でなければならない。

（神保格）

大東亜戦争勃発までは、大抵の中等学校において、一学期といふ貴重な長い月日に亘って、英語の発音が専ら教授されてゐたさうである。発音は語学習得のうへに大切なことにちがひないが、ジョウズンの口真似を一学期に亘ってやることは、何人の発案によつたものか、全く愚劣極まるものであり、発案者自身は大いに咎打たれなければならない（本多顕彰）(3)。

英語を大東亜共栄圏が日本語化するまでのプロセスと考えたり、言語を利用して八紘一宇の手段としたり、言語のもっともプリミティブな発音教育を蔑視したり、これでは戦争に勝てるはずはなかった。英国の日本語教育、というより外国語教育にはこうした大義名分をうたう伝統は皆無である。学問や教育の方法はこの国の伝統的哲学に則って、あらゆる観念論をきらい、徹底して経験主義 empiricism であった。

ところで、ダニエルズ他2名の教師たちは学生5名から1度に200名以上にふくれあがった SOAS の日本語・日本文学科の学生にどう対処したか。以下、ダニエルズ教授からの直接の教示と、数字や年代や人名などの正確なデータは教授の論文、“JAPANESE STUDIES IN THE UNIVERSITY OF LONDON AND ELSEWHERE—An Inaugural Lecture delivered on 7 November 1962 S. O. A. S. University of London 1963” と SOAS の University Calenders の類を参考に素描してみたい。

\*

\*

\*

1942年5月、SOAS の日本語教育は完全に戦時体制下の、いわゆる特訓・集中コースとなる。日本文学は捨てられ、実用日本語の実際の訓練は平均1年3ヶ月を一定の学習期間に定め、ほぼ4年間にわたり、連続的な猛訓練が行われたのである。こうした戦時体制下の特殊コースがなくなったのは戦後の1947年であった。戦時下の SOAS は200名以上の学生をかかえたコースの他に2つのコースが設立された。1つは Mr. (後に Professor) Rideout の担当した6ヶ月間の翻訳コース（法律・条文・暗号・電文・軍用語の一切）で、このコースは約160名の学生が受講。もう1つは10週間コースのもので、SOAS 内の音声学・言語学科 The Department of phonetics and Linguistics の指導のもとに日本語の口頭による通信を録音し、日本語の発音に慣れさせ、正しく聴き取る能力を養わせる目的のものであった。このコースに参加した学生は約180名である。そしてこの2つのコースを担当する教官は全員 SOAS の日本語学科に配属され、同学科はじつに540名を越える学生数に急増したのである。学生たちのほとんどは——この中に現在の英国の日本語の大御所的存在：ピーズレイ（日本史）・オニール（日本古典文学）・ドアー（社会学）などの教授

たちがいるが——英国各地のグラマー・スクールやパブリック・スクール、または大学での学士号取得者から特に選抜された優秀な学生たちであった。彼らは所定の日本語特訓を受けたのち、情報将校として戦場に赴く。さらに SOAS には異色の軍人教師が登場する。日英同盟以来、さらにロンドンのジャパン・ソサエティ発足 (1891設立) 以来、日本通をもって自認した F. S. G. Piggott 陸軍少将である。ピゴット将軍は中尉か大尉時代に『草書初歩』Elements of Sōsho と、いう軍人らしからぬ、優雅な著作を上梓した人物で、SOAS では専門的な、軍用語ではない、普通文の翻訳者養成コースを組織してみずから教授にあたった。わたくしの SOAS におけるかつての同僚で、将軍の講義を聴講した先生たちの想い出を総合すると、当時の学生たちは将軍の日本語・日本文にたいする学識に最後まで半信半疑であったそうである(4)。ダニエルズはまた日本軍捕虜に日本語で口頭質問ができる専門家や、日本語一般に通じた言語学の専門家を育成するコースを SOAS 内に設けて指導訓練にあたった。こうした戦時下の特殊訓練の中から、ある学生たちは戦場に赴かず、日本語指導教官<sup>インストラクター</sup>として SOAS に居残り、さらにかれらは学生に日本語を教えながら SOAS での日本語・日本文学に関する学位論文取得のための研究を同時に開始していた。

1944年12月、対独・伊、対日戦争の終結はもはや英国政府においては時間の問題だったが、英国外務省はここでやっと重い腰をあげ、「東洋・東欧・アフリカ研究相互部門委員会」The Inter-departmental Commission of Enquiry on Oriental, East European and African Studies を設置し、委員長にスカーブラ卿 Lord Scarbrough が任命された。これが後「スカーブラ委員会」Scarbrough Commission として知られ、英国の諸大学における日本学の研究と教授の具体的問題に深くかかわってくる公的機関である。

1945年8月14日、日本はついにポツダム宣言を受諾して無条件降伏し、第2次世界大戦は全面的に終了した。同年翌月の9月19日付で、SOAS の当時のダイレクター (学院長) は SOAS 全学科の諸案とともに日本語・日本文学全般にわたるカリキュラム・教授職設置の計画書を「スカーブラ委員会」に提出した(5)。日本語・日本文学に関する部分を実際に起草したのはダニエルズである。かれはこの委員会にダイレクターを通して日本学関係の教官のポスト17を要求した。その内訳を見ると、当時のダニエルズの日本学の構想がだいたいわかる。すなわち、17のポストのうち、10は日本語と日本文学。2つは日本仏教学と神道 (民俗学・民間信仰を含む)。残りの5つのポストは日本の経済・法律・社会の制度・組織・慣習の専門家であられるべきこと、などである。自然科学の分野を除く人文科学・社会科学の全体をカバーした、ダニエルズのこの本格的な日本学設立への提案は大戦後の英国経済の地盤沈下による教育予算の不足のため、ただちに提案どおりに認可されることはなかった。SOAS の日本語・日本文学科はいぜんとして戦時体制下の3名のままであった。ただし、この3名中2名は対日戦争中に移動があった。1921年から教えていた N. E. Isemonger は1943年に退職、1923年以来、モーコ語と日本語の言語学者として活動した S. Yoshitake は日本語の古語の音韻組織にすぐれた研究を残したが(6)、1942年に病没した。したがってダニエルズは SOAS に来てから1年後に日本人教師を失い、他の英

国人講師も教壇を去ったことになる。日本語・日本文学のアカデミックな研究は大戦勃発以来、事実上不可能であったが、その継続はここにきてまったく中断されてしまう。対日戦下における日本語の教授はなによりも実地的でなければならぬ。文学作品の安閑たる読解・鑑賞など許されるときではなく、また英国の大学にはその余裕もなかった。空席となった他の2つのポストにはぜひ日本人教師がのぞまれた。当時、教育のある日本人といえはダニエルズ夫人のオトメ女史しかいなかった。オトメ夫人が生前ロンドンの自宅でわたくしに直接語ったことによると、夫人は夫君とともにドイツ空軍の空襲下にあったロンドンから最後まで離れず、夫君の講義の教材作りを助け、みづからも SOAS の教壇に立ちつづけたとのことである。夫人は結婚後、法的には英国人となったが、日本で生まれ育ち、教育をうけた純粋の日本人であり、当時、外出するときもロンドンの警察の保護下において、日本人として直接迫害は受けなかったそうであるが、警察より疎開をすすめられたさい、「英国が戦っているのはわたくしの国です。どうして逃げまわる必要があるのでしょうか」と言いきった女傑である。わたくしはこの毅然たる中にも物腰が華やかで、しかもかぎりなく優しくあったセントジョーンズウッドの老日本婦人を回想することに哀惜の念に堪えないのである(7)。

ダニエルズは太平洋戦争開始とともに敵国人として隔離収容されている日本人を SOAS の日本語科のポストにつけようと努力した。1人は元、共同通信の記者、S. Yanada. もう1人は三井造船会社社員だった S. Matsukawa である。ダニエルズは1通の書簡を英国政府に送り、自分一個人の責任下において、この日本人を SOAS の日本語科の講師に任命する許可が与えられるよう陳状したところ、いくつかの条件つきで許可はおりた。Yanada 氏の述懐によれば、身許は法的に完全に保護され、SOAS 勤務にはいささかの支障もなかったとのことである。太平洋戦争中、日本国内でこのようなことが一大学教師に可能だったのだろうか。そして英国政府や英国人の戦争にたいするしたたかさを感じるのはわたくしの僻目であろうか。SOAS の日本語科はここでダニエルズと日本人講師2名、都合3名となって旧に復した。ヤナダ・マツカワの両日本人は、いずれもすぐれた教師で、同時期にアメリカのコロラド大学の日本語速成コースで指導にあたっていたアシカガ氏とならんで敵国にあった教養ある日本人教師の代表的人物である。かくして、1943年以降の SOAS の日本語科はダニエルズ・オトメ夫人(非常勤)・ヤナダ・マツカワの教授陣に、さきのライドアウト・ピゴット將軍、音声学・言語学科のスタッフが加わって、日本語の翻訳・発音・作文・会話(尋問)・書き方などすべてにわたる特訓が行われたのである。

\*

\*

\*

つぎに、大戦後の SOAS の日本語・日本文学科の新編制と、同科の1960年頃までの実態を概括してみたい。

まず、前述した「スカーブラ委員会」に申請した SOAS における日本学の17のポスト

は、いぜん実現されないでいたが、それでも戦時体制下の日本語特訓学生の中から将来アカデミズムの世界に入っていく学者が育ってきた。C. J. Dunn と D. E. Mills は戦時下の SOAS の日本語特訓コースで教師としての訓練を受けたインストラクターであったが、2人は1947年に SOAS の日本語・日本文学科の専任講師となった。ミルズは SOAS で日本文学の B. A. を取り、以後、『宇治拾遺物語』の研究で PH. D. の学位を取得する(8)。ダンも古浄瑠璃を中心とする江戸文学の研究をすすめていく。戦時下の SOAS で日本語の特訓を受けて戦場に赴いた学生、また SOAS 以外のベッドフォード・コレッジ内にあった、政府による日本語コースをとっていた学生、さらにインド・オーストラリア・カナダといった英国連邦諸国の大学や付属機関などで日本語を学習したもの、それらの多くは第2次大戦中の所定の勤務を終え、終戦とともに日本語・日本文学で学位 (B. A. また PH. D.) をとるために続々と SOAS に集まってきた。SOAS の日本語・日本文学科は、当然のことながら戦時下のカリキュラムの大はばな修正をせまられた。まず、大学としての SOAS の日本語・日本文学科の第1年次は、原則として日本語を知らぬ学生を対象としなければならないことであった。1年生のために最少限度の語彙と漢字のリストを作成する必要があった。これには、ダニエルズの日本滞在中の Basic English による和英辞典作成資料の副産物として、1942年から SOAS の初心者のために導入された714語の基本漢字とその組み合わせによる基本語彙のリストが使われた(9)。日本国内における新仮名遣いや当用漢字のいく度かのめまぐるしい変遷は日本語を学ぶ外国人にとっていささか迷惑なことであったが、そのつど日本の国語審議会の新案に対応し、改定の責任をとったのが、戦時中からの S・ヤナダである。初年度は現代日本語にかざられるので、大体、戦時下のやり方を踏襲すればなんとかがやっていた。だが、2年目、つまり2年生の授業には教える側の英国人教師が、新たに学ばなければならないことがほとんどであった。英国の大学の文学部学士コースで古文を学ぶのは常識である。古文教授は英国アカデミズムの至上命令のごときのものであった。だが、古文を教えることになれば SOAS の3名の教授陣には注釈書も参考書も不足していた。そこで開かれたのが毎週1回1時間半のスタッフ・セミナーと称する研究会である。これは現在でもつづいている(10)。ここで英国人教師は教授すべき古文についての知識をたくわえることができたが、古文解釈についてみずからも勉強し、英国人教師にたいして先生の役割を果たしたのが、戦時中からの日本人講師、さきの築田・松川両氏であった。現代日本語しか知らないダニエルズがいきなり古文が教えられるようになったのは、この週1回のスタッフ・セミナールにおける教師の勉強会であり、そこでとりあげられた古文の作品は12世紀から19世紀までのもので、『今昔物語』—「姓名を呼ばれて野猪を射頭す話27巻34話」「近江国の篠原の墓穴に入る男の話28巻44話」、『埴中納言物語』—「花桜折る少将」、『太平記』—「大塔官熊野落ちの事」、『御伽草子』—「さざれいし」、『風俗文選』—「富士ノ賦」「養蟲説」、『<sup>昔</sup>男を<sup>通</sup>風伊勢物語』、『雨月物語』—「夢応の鯉魚」、『玉勝間』—「ひとむきにかたよることの論ひ」、幸田露伴『五重塔』—其三十一・其三十二などであった(11)。

ところで、こうした日本古典にたいする悪戦苦闘の勉強会がつづけられているうちに、さきの Scarbrough Report の成果として、日本の書籍購入にたいする特別の交付金がおりにことに決まった。当時の日本はまだ敗戦後の混乱期にあり、SOAS 側が入手できる書誌目録の情報はほとんど整備されたものはなかったが、東京神田を中心とする古書店・古書市にあふれる活字本・木版本・写本の類いはきわめて廉価であった。ロンドンにおいて日本語の購入図書目録を作成することは大変困難な仕事だった。それでもどうにか見当をつけて、1949年、SOAS の中国学科の主任、サイモン教授が短期間、日本を訪れ、SOAS 図書館の図書購入が開始された。1950年、こんどは日本語・日本文学科を代表してダニエルズが日本へ行き、書籍を買い集めた。日本の古書店ではすでに絶版本、あるいは稀書・珍本の類いが格安で手に入った。ただ、日本の戦後の教育政策はほとんどアメリカ軍の G・H・Q の指導下であり、多数のアカデミックな文献資料が英国に流出することをよるこばぬアメリカ側を刺激しないように、日本入国時のダニエルズの身分は大学教師ではなく“merchant”だったという逸話が残っている。1951年の終わりがらまでに大体、日本文学古典の注釈書類と日本語・日本文学教授に直接必要な書籍はおよそ備わった。その後も歴史・経済・地理・社会・法律といった日本学全体にわたる書籍の購入はつづけられ、現在、SOAS の図書館で日本関係のセクションはそこを訪れる日本人学者が賛嘆するように、西ヨーロッパ最大の蔵書数を誇っている。だが、年々出版される日本国内での発行部数は1962年現在で英国の1倍半、現在では10数倍といわれる。それらをいちいちセレクトして購入することは至難の業で、1970年代後半から SOAS は法外な値段のつけられた博士論文的巨著・大著の購入を断念して、クオリティー中心に選別の方針がかわってきたようである。

1949年、現在、SOAS の日本語・日本文学科の主任教授である P. G. O'Neill が帰ってきた。オニールは戦時下の日本語特訓学生の1人で、太平洋と日本での服務をおえて、学位取得のため SOAS に復帰した。後、かれは能楽研究で PH.D. の学位を取り、ダニエルズ引退後は文字通り、日本語・日本文学科の最高責任者として今日に至る。また、現在、日本の社会制度の研究者として高名なサセックス大学の R. P. Doore は1951年に SOAS のスタッフに加わる。ドアーは SOAS の日本語・日本文学科出身で、日本語・日本文学以外の分野で大学のポストを最初に得た研究者である。記述したように、ダニエルズは SOAS の日本学のポスト17を要求しておいたが、「スカーブラ委員会」はドアーに社会学 Japanese Institutions のポストを与えただけで、経済学のポスト実現は1950年代まで無理であった。1960年代に入り、SOAS の新設学科、政治経済学 Dept. of Economics and Politics の中に日本・中国経済のポストが設けられ、S. A. Broadbridge が初代講師となった。日本の法律学のポストは実現しなかった。経済学と同様、日本と中国の法律学の講師は法律学科 Dept. of Law で任命されているが、そのタイトルは誤称であって、1962年には「日本の」という冠称は講座名からはずされている。

日本語と日本文学以外の講座で他に日本史学の分野で2つのポストが要求されていた

が、これはすんなりと許可された。1947年に極東史初代講師として、W. Beasley が任命され、ピーズレイは1954年に史学科全体の学科主任に昇格したため、かれの極東史講師職は G. W. Robinson が後任として就任したが、ロビンソンは翌年1955年に辞職した。その後、極東史・日本史が中心の一の講師職はなかなか人材が見つからなかった。西洋一とくに英語圏においては、日本史研究の専門家が育っていなかったというのが実情であるが、日本国内には日本史の専門家はたくさんいたにもかかわらず、英語で学生に講義のできる日本人史家は、望んでも当時はまったく得られないのが現実であったということである。

つぎに、日本仏教学のポストである。SOAS の日本語・日本文学科には「スカープラ奨学金」で日本仏教の研究を行っていた学生がいて、これに仏教学のポストが与えられようとしたが、この候補者は最後になってことわった。そこで日本仏教学というこのポストは、<sup>キャンディデット</sup> 範囲を極東の仏教学というふうに拡大して、S. Weinstein が任命された。ウェインスティンは日本仏教学で学位をとった学者であるが、このポストはその学問上の資格 academic qualification の点で適任者を見つけることが特に英国では困難をきわめたらしい。

日本に関する社会学のポストは1956年、さきの R・ドアーがカナダのバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学に転出したため、いったん空席となったが、数年後にドアーはロンドン大学スクール・オブ・エコノミックスの極東系社会学のリーダー（準教授相当）となって帰英したので、ドアーによる日本語原典にもとづく社会学的研究と教授が SOAS 以外ではあるが可能となった。

日本仏教学の他のポストとして神道学・民俗学の講座はその後何の進展もみせなかった。しかし、学問的業績としてはずっと後になって実現してくることになるが、それは次稿でとりあつかう予定である。

1962年、それまで日本語・日本文学科のリーダー（準教授）であったフランク・ダニエルズは同学科の教授、<sup>チニア</sup> 学 科 主任に任命され、同年11月7日、主任教授就任演説を SOAS で行った。その時の同学科のスタッフは総勢7名で、このうち6名が日本語・日本文学を担当し、他の1名は日本仏教学を教えていた。

ダニエルズ学科主任が実現するまで日本語・日本文学科のスタッフに移動と変化があった。戦時中より教鞭をとり、日本文学史<sup>(12)</sup>・その他、テキスト作成・校訂に大きな貢献を果たした松川氏は1955年に停年退職した。SOAS の日本語・日本文学科に日本から直接国文学者を招く海外招聘講師 Oversea Lecturer の制度ができたのは1955年の松川講師引退の年からである。第1回は中世文学専攻の国文学者、池田重氏、第2回は古代文学の西郷信綱氏である。

ダニエルズが学科主任教授に就任した1962年までに、氏が帰英してから21年の歳月が流れていたが、SOAS を中心とする日本学の講座は神道・民俗学を除いて、言語・文学・史学・仏教・経済・社会と、ほぼ、当初の希望ポスト——「スカープラ委員会」への申請分



——が実現したといえる。戦争という、日英史上かつてない最大の危機をくぐりぬけて、英国の大学に日本学の確固たる基礎をきづくまでのダニエルズの努力は、止むをえぬ戦時下は別として、終戦の1ヶ月後には日本学全般を網羅した教授陣の拡張、カリキュラムの新編制（古典の導入）、さらに日本学にたいする将来のビジョンにおいて、徹底的なアカデミズムの精神につらぬかれたものであったといつてよい。そこにダニエルズの、国民世論の動向にまどわされぬ、頑固なまでの学者としての良心と、それを実現させていった英国アカデミズムの長い伝統があったというべきであろう。とくに戦時中、同僚として働いた日本人教師にはつねに保護者の立場に立ち、戦前・戦後を通じてかれら敵国日本人教師に変わらぬ尊敬と感恩の誠をささげたのである。実際、SOASの日本学の基礎は、ダニエルズが言うように、これら日本人教師の知識なしにはきずかれなかった。時局の変化によって、右に左にころころと方針の変わる国の外国語教育と英国のそれとでは、どだい学問そのものの性格が根本的に次元を異にしているように思われてならない。

戦争末期の1944年ごろから、SOASに日本学の基礎がほととのうに至るまでの1960年代のはじめまでに、日本学で学士号をとったものは26名を数える。その中の6名は大学の教職につき、3名はSOASの講師となった。1947年にはケインブリッジ大学の東洋学部 Faculty for Oriental Studies に日本語・日本文学科が設置されるや、SOAS出身のカーメン・ブラッカーとダグラス・ミルズが赴任し、他の1名はオーストラリアのシドニー大学に赴任した。さらにK. B. ガードナーはSOASの図書館の日本語書籍関係の責任者 Assistant Librarian であったが、大英博物館（現・大英図書館）の東洋書籍及び写本部の部長 Keeper といふ要職についた。さらに1名はアメリカ合衆国・ハワイ大学の東洋学図書館のダイレクターとなった。さらに他の1名は外務省に入り、日本勤務の外交官となり、後、駐日英国大使となる。残りは実業界、出版界、あるいは学校教師となった。本稿で記述したのは戦中・戦後1960年初期までのロンドン大学SOASのダニエルズ教授を中心とする日本学の発展の素描であったが、それ以後から今日までの状況はおおむねわたくし自身の英国における教壇生活と部分的に重なり合っている。実は本稿ではそこまで述べ、さらに英国日本学の将来への展望に言及する予定であったが、紙数も尽き、別稿にゆだねてひとまずペンをおく。

(1)本稿は本誌第18号同題の続きとして書かれる。前稿での誤植を下記のごとく訂しておく。P. 4. 34行、王道→王堂。P. 8. 8行、16行、19行、レデスデル→レーズデル。P. 9. 31行、1945→1941。

(2)オグデンの Basic English の理論は1930年代に言語学界に登場したといわれ、当時日本滞在中のダニエルズはこの理論にもとづく和英辞書編纂の必要性を感じ、はやくも第1回日本滞在中の1931年にその希望を Ogden 本人に伝え、賛同を得る。1932年に帰英したのは表向きは英国海軍省勤務であったが、1927年以来 Orthological Institute を主宰していたオグデンの、そのロンドン支局で Basic English 関係の仕

事に従事し、帰英の翌年1933年春、海軍省勤務を辞め、再度来日。Basic English による和英辞典が刊行されたのは、着手の年から数えると実に38年後の1969年であった。『BASIC ENGLISH 英文を書くための辞書・JAPANESE-ENGLISH WORD BOOK』（北星堂書店 1963年初版）。

- (3)川澄哲夫「英語教育存廃論の系譜」(『英語教育問題の変遷』研究社版 PP. 116~117.) 参照。引用文の第3番目の内容上の事実「一学期といふ貴重な長い月日に亘って、英語の発音が専ら教授される云々」には反論がある。だが、日本における英語教育の発音軽視の態度は動かない。前掲書 P. 119。
- (4)たとえば、SOAS の D教授がプライベートに語ったところによると、将軍の講義は、侯・公・伯・子・男の意味と書き取りで終わったとのこと。将軍の講義をカバーしたのはダニエルズである。
- (5)Letter from the Director of the School of Oriental and African Studies to the Secretary for the Inter-Departmental Commission on Oriental, Slavonic, East European and African Languages and Cultures, 19. Sep. 1945. Appendix D (P. 11.). ダニエルズ所蔵。
- (6)本誌『日本文学研究』第18号所載拙稿の注(35)参照。
- (7)オトメ・ダニエルズは夫君の亡くなる3年前、ガンのためロンドンの病院で亡くなった。葬儀は SOAS の仏教学講師、稲垣久雄博士の読経により、仏式で行われた。
- (8)後年、A COLLECTION OF TALES FROM UJI—A Study and Translation of Uji Shūi Monogatari (Cambridge University Press 1970) として公刊される。
- (9)ダニエルズの基本漢字・語彙のリストをもとに1962年、P. G. O'Neill and S. Yanada の “An Introduction to WRITTEN JAPANESE” が出て、これが今日まで SOAS 日本語・日本文学第1学年の漢字入門教科書となっている。本書は漢字680字を使った日本語を16課にわけて読み、かつ書く練習用として英語圏諸国の大学中、最も古いものであろう。付録には当時の当用漢字1878字が全部収録され、各課の短文にはローマ字による書き下し、文法・解釈上のノート、さらに英訳が付されている。初年度の学生は本書と1958年に C. J. Dunn と S. Yanada との共著で出た “TEACH YOURSELF JAPANESE” の日本文法書と上記の「入門」を併読するのが常とする。
- (10)わたくしが SOAS の日本語・日本文学科で教えたのは1974年から81年までであるが、その間のスタッフ・セミナーでとりあげた作品はヨーロッパ語に翻訳されていない作品をということで、『宇津保物語』『俊蔭』がえらばれた。7年半の間に英訳・注をほとんど完成したはずである。いずれ公刊されるであろう。
- (11)このスタッフ・セミナーの成果はフランク・J・ダニエルズを編集主幹として1958年、“SELECTIONS FROM JAPANESE LITERATURE (2 TH TO 19TH

CENTURIES)” のタイトルのもとに LONDON の書肆, LUND HUMPHRIES から出版されている。まず日本語の原典をかかけ, その前に文学史的な序説, 作者伝, 本文の詳細な注釈が第1部で, 第2部は Transcriptions と Translations からなる。本書は日本古典の学問的注釈書として欧米では先駆的なもので, 後, 本書にとられた作品を研究の出発点にした学者も多い。

- (12) 当時学生であったオニール教授は, 松川講師の講義をノートし, それをもとにして, *History of Japanese Literature* (『記』『紀』『万葉』から徳川時代末までの文学史) をタイプ印刷して, SOAS 日本語・日本文学第2学年の教科書とし, これを担当するのは歴代日本人講師ということになっている。 (未完)

よる分類を行なう。一族の門名を記す時は、初めに本家の門名をあげ、それより位置を下げて分家の門名を記す。分家から出た分家はさらに位置を下げて記す。門名の右の（ ）内には想定される漢字を記し、< >内には姓を記す。〔絶〕は絶家、〔移〕は他地に移った家である。なお、後に分類して記すさいの便宜のために、すべての門名に通し番号を付した。

- (2) 戸主が他地出身である本戸が一家ある。妻は本戸出身で、妻の父の懇望により、本戸加入が認められた。

## I 門名一覽

「フリヤ」門名を持つ一族、「ホンケ」門名を持つ一族、それらを持たない一族の順にあげる。

- 1 ナカノフリヤ (中の古屋) <中西> 中西は地名であり、かつ、姓である。
- 2 ニーヤノヤシキ (新屋の屋敷) 〔絶〕現在は本家所有の畑の名である。門名は「ニーヤ」であったか。
- 3 シンヤ (新屋) <中西>
- 4 ウエノヤシキ (上の屋敷) 〔絶〕天保年間の火事で焼けた。門名は「ウエ」であったか。「シンヤ」の上の位置に家があった。現在は畑の名である。
- 5 ヒタノヤシキ (下の屋敷) 〔絶〕「シンヤ」の下に家があった。現在は畑の名。
- 6 ナカ (中) <上田> 「フリヤ」と「シンヤ」の中間に家があった。現在の家は別の場所に移ったが門名は変わらない。
- 7 セ下 (背戸) <中西> 「フリヤ」の裏手に分家した家。
- 8 ヒガシネー (東の家) 「フリヤ」の東に分家した家。
- 9 オーエノマエ (大江の前) <中西> 「オーエノホンケ」の前に家を建てた。現在は「オーエノホンケ」跡に新築して移ったが、門名は旧のままである。
- 10 ハマ (浜) <中西> 浜に出て飲食店をしていたのでこう呼ばれる。現在は林に帰っているが、門名は旧のままである。この家には、別に「11 ハマキュー」(浜久)の名もある。これは妻の名のハマと夫の名のキュー(九四郎)を合わせた門名と言う。漁家の命名法の影響を受けたものか。ただし、夫婦名を合わせたばあい、妻の名は接頭辞「オ」を持っているのが一般である。「ハマキュー」のハマは場所を冠したものかもしれない。
- 12 ツボネ (?) <津守> 門名の由来は不明。九州では隠居所を「ツボネ」と言う